

勤労奉仕の名目で東京へ 修学旅行に。一番の思い出です。

1905年、愛知淑徳女学校が誕生し、翌年に愛知淑徳高等女学校が開校しました。先進的な教育と高女には珍しかったスポーツの奨励で、昭和十年代前半、愛知淑徳はオリンピック選手を輩出するなど「スポーツ黄金時代」を迎えます。卒業生に学園の思い出を語っていただくシリーズの第23回は、高等女学校第33回卒業生の伊藤喜久子さんに登場していただきました。在学中に開戦を迎え、戦争色の強い学園生活でした。



愛知淑徳高等女学校第33回卒業生
(昭和16年度卒業)

伊藤喜久子さん(旧姓:村瀬)

大正13年10月30日生まれ。現在86歳。
愛知淑徳高等女学校に昭和12年4月入学、17年3月卒業。21歳で結婚。
終戦後、西区に開園した幅下幼稚園で仕事をしながら、一男二女を育てる。
昨年、長男夫妻に仕事を譲り、現在は悠々自適の生活を送っている。
写真の背景は幼稚園の園舎

1歳の時に父が結核で亡くなり、母は教員をしながら兄と私を育ててくれました。当時は高等小学校で教育を終える子どもが多かったのですが、母が教育熱心で、自分の母校であった県一(愛知県第一高等女学校。現在の明和高校)に私を行かせたかったようです。でも入学試験のお裁縫の実技ができずに落ちてしまい、かんかん怒られました(笑)。淑徳は国語や算数、習字など、入試は学科だけだったので合格できましたが、今となっては淑徳でよかったと思っています。

住んでいたのは西区の明道町で、池下にあった女学校へは市電を乗り継いで通いました。当時、ほとんどの生徒は部活に入っていました。が、私は授業が終わるとすぐに帰宅して

高等女学校に入学した昭和12年、夏の制服で記念撮影



昭和16年、関東方面へ修学旅行。後列右端が伊藤さん



る人がたくさんいました。そういう人が持つてきた小麦を量って、粉やうどんと交換し、手間賃をもらっていました。帰宅すると夜中です。朝はなかなか起きられず大変でしたが、学校は休まずに通いました。

いました。というのも、明道町の母の実家は明治時代から小麦粉の卸をしていたのですが、一緒に暮らしていた叔父が西区の稲生町に小さな製粉所を作ったので、その仕事を手伝うようになったのです。学校が終わって4時位に家に帰り、着替えてから浄心まで市電に乗り、そこから歩いて製粉所へ向かいました。その頃はもう食糧は統制されていて、空いている土地があれば市道でも勝手に耕して畑にしていた

思い出に残っている先生は、二代目の校長先生だった小林龍二郎先生です。機嫌のいい時にはこにこして冗談を言われたりするの、怒ると怖かったので、気配が怪しくなるとすぐ逃げました(笑)。お作法の伊藤浪先生の茶道の授業はずっと正座で、足がしびれたらといって足を崩すと怒られましたね(笑)。

とにかく学校は厳しくて、少しでも派手なことをすると「教護連盟(先生たちが連携して生徒の行動を監視していた組織に言うぞ)」と脅されました。友達同士で映画やお芝居に行くなんて考えられませんでした。大須のスケートリンクへ滑りに行った同級生が教護連盟に見つかり、1週間停学になったほどです。

授業は徐々に勤労奉仕が増えました。兵隊さんの帽子に付いているバッチのような固いものを取ってほどこき、柔らかい戦闘帽に作り直したりしていました。制服は上着にプリーツスカートでしたが、戦争が始まると、上はそのままで下はもんぺになりました。体育の時は体操服で、下はブルマー、頭には鉢巻をまいていま

した。体育の授業では、体操や球技をした覚えがあります。立派なブルマーがありました。そこは部活の水泳選手が練習していました。戦時中でしたが、5年生の秋に東京、日光、箱根へ修学旅行に行きました。ただ時代が時代ですから勤労奉仕という名目で(笑)。でも実際に皇居の広場を拡張する工事現場で、竹で編んだザルに砂を入れて運んだりしたんですよ。旅行は四泊か五泊で、浅草や日光東照宮を観光しました。普段は厳しかった先生たちと一緒にしゃべり、楽しかったですね。いい思い出です。

淑徳を出て2年後に結婚しました。それからしばらくして、空いていた土地で幼稚園を始めました。家から近く、母がどうしてもやりたいと言ったのです。私も主人と一緒に働き始め、それからはずっと、昨年まで保育や経理の仕事をしていました。

5、6年前までは気の合った同級生たちと定期的に同窓会を開いていました。ずっと仲のいい友達とは、今でも栄のオアシスで待ち合わせて遊びに行ったりしているんですよ。今もつきあえる友達を作ることができて、淑徳でよかったですね。(談)



高女の同窓会「燦々会」では、さまざまなお出掛け。平成3年は熱海へ。MOA美術館前で。前列右から2人目が伊藤さん